

随想 歴史と小説

（歴史上の人物の心意気に想いをはせて）

（株）PPQC研究所 加藤 宏光

筆者は子供の頃から読書が大好きであった。小学生時代も運動はからきしダメであったので、暇さえあれば本を読んでいた。

当時学級文庫としてクラス毎に二〇〜三〇冊ほどの本が教室の書庫に設置されていた。休憩時間に、多くのクラスメートが運動場で活発に走り回っている中、筆者はもっぱら学級文庫の本を読みふけていた。

筆者の子供時代の読み物としては冒険物語・豪傑物語が胸躍らせる物語の両横綱であり、月刊少年雑誌にはさまざまな物語が連載されていたものである。

あつた前田慶次郎利益が主人公である。

前田利春（利久・利家の父・利家は利春の四男）がまだ能登の城主であった頃、織田信長の命で跡取りを利久から利家へと定められた。

このため、本来養継子つまりは将来城主となるはずであった《前田慶次郎》は利家の元を出奔し、一介のカブキ者としてのいくさ人として生きて行く。

《カブキ者》とは、バサラに続き、生き方に男気を体現したもので、当初のバサラ（婆娑羅）は南北朝の時代に形骸化した権威にあらがう意思を派手で特異な衣装をまとい、社会の制度を無視して生きることで世にアピールする人を指した。反骨の大名、佐々木道誉や土岐頼遠が代表として挙げられよう。さらに時代が下って戦国時代も終わりに近づいた頃は傾奇者と呼ばれるようになる。

時代が進んで社会人となつてから、久しぶりに《これぞ時代劇》と思わされたのが、司馬遼太郎による《燃えよ剣・一九六四年文藝春秋より発行》であった。司馬遼太郎は克明な時代背景の描写といかにもリアルを思わせる筆致による心理描写を組み合わせて、史実を思わせながら物語を書き進める。幕末を舞台とした少年物語では《勤王の志士・鞍馬天狗》が主役で、近藤勇をはじめとする《新撰組》は敵役として悪評を集めていた。その悪役新撰組に焦点を当て、人間味を掘り下げ、取材を基にした史実を加味しながら語り進める筆致か

戦国時代も終わりに近づいた頃が《前田慶次郎》の活躍した舞台である。皆朱の槍を許された《慶次郎》の活躍は戦場（いくさば）より、もっぱら街場での理不尽を諧謔ぎみにいさめたり、時の権力者であった豊臣秀吉にこびることなく振る舞った行動にある。

確かにこれらの物語は時代背景の考証・調査がよく行き届いているため、ストーリーそのものが史実であったような錯覚に陥る。また読んでいくうちに、主人公に心が共鳴してしまうため、正義感（道徳観）が影響されてしまう（少なくとも筆者の経験ではその傾向が強かった）。また、主人公の実像への興味が深くなり、さまざまな書物で物語にあったエピソードをカウニングターチェックしたくなった。《燃えよ剣》を最初に読んだのが、発行されて一〇年余りたった、筆者が三二〜三二

ら、日本人が共通して持っている判官鬚（ほうがんひげ）《滅びゆくもの美学》への傾倒をかき立てられる物語として心に残った。

《燃えよ剣》はその後に連続テレビドラマとしても好評を博した（一九七〇年四月より二六回NET、現在のテレビ朝日で放映。栗塚旭主演）。

主人公は《新撰組副長・土方歳三》であり、鬼の副長として知られた土方歳三が、豊かな人間性を隠して、組織をまとめ上げるために《新撰組局長・近藤勇》を看板に頂いて、副長の立場に甘んじながら、組のため一途に尽くした姿。また、近藤勇亡きあと、

歳の頃であり、また《一夢庵風流記》を書店で見つけたのが一九九一年を過ぎた頃（筆者が四八歳の頃）であった。

いずれの主人公も反骨の士であり、体制（あるいは大勢）の矛盾に真っ向から盾突く反逆児としての姿勢に、《婆娑羅》の粋を感じたものであった。とくに、前田慶次郎のそれぞれの逸話には痛快を感じ、また一匹狼として体制に逆らいきれず、それでいて順応しきれない《もどかしさ》からくる儂さ（はかなさ）が裏に潜んでいることを感じたものである。

明治維新は、新撰組が（土方歳三）がどのように頑張つても、五年の遅れで今ある形へと進んだし、前田慶次郎がバサラとして意気を発して、時代は豊臣から徳川へ推移し、前田慶次郎は心意気を感じた直江兼統と共に米沢の地で土に返った。

大勢を占めるのは、いつの時代でも変わらない（と感じる）。その傾向は、昨今の事件・騒動でも同じで、権力が集中すればその力を付度する気持ちは生じる。自己保存の本能がそうさせるのである。

いま、コロナウイルス性の新型肺炎が世界中へ広がっている。そして、その防衛に専門家たちが最良の道を模索し、テレビ報道等を通じて提案している。しかしこの国の指導者たちは、何かを付度しながら最良の道を迂回しているように感じられてならない（二〇二〇年二月二十四日、午後公表された政府の新型コロナウイルス対策専門会議の内容を知って）。

今という国家にとって大事な時に、《心ある専門家たち》の思い（提言）を単にバサラ者のつぶやきとしてしまふ《愚》を冒してほしくないものである。